

# 共稼ぎ家庭における児童

—両親の生活としつけ—

日本女子大学 児 玉 省

宮本美沙子

戦後共稼ぎ家庭が非常にふえてきたが、共稼ぎ家庭の子どもがどのような状態におかれ、どのような影響を受けているか、共稼ぎ夫婦と子どもとの関係を検討しようとしたのが、この研究である。

この調査は、基本調査で（学歴・職業・収入・共稼ぎの理由など）、父親調査（共稼ぎに関する意見）、母親調査（育児および共稼ぎに関する意見）、子ども調査で（日常生活の状態および意見など）をしらべた。協力を得て調査ができたのは二十七家庭、子ども数三十九人であった。

家庭の職業は、父親は、会社員、公務員、教師、医師など。母親は、教師、会社員、公務員、医師、アナウンサー、雑誌記者などで、いずれも大学または専門学校出の知識階級の家であった。

共稼ぎの理由は、経済的理由だけ三七％、経済的およびその他の理由四〇・八％、その他の理由二二・二％で、経済的な理由が一番多くなっている。

共稼ぎ家庭では、両親の留守中、子どもの世話、祖母約三五％、祖父約一四％で、約五〇％の子どもが祖父母に養育されている。したがってそのしつけの上には、祖父母の影響が普通の家庭より多い

ということになる。一日中一人で置き去りにされている子どもはいないが、女中だけに世話されている子どもが二七・九％あった。

共稼ぎの利益として、父親は、経済的な点、妻の向上、夫婦相互の理解等をあげ、短所として子どもが不十分をあげている。母親では長所として、依頼心がなく自主的、母を誇りとするなど、短所は、親子の話し合いの時間が少い、甘やかし勝ちになるなどである。

母子がともに過す時間は、この調査では、最低二時間最高九時間で、一番多かったのは三〇・三・五時間であったが、一般家庭で七〜八時間なのにくらべて、わずかにそのまである。次に、働く母親は、子どもに対して現在以上、何を、してやりたいと望んでいるか。遊び相手、勉強相手、しつけなど、子どもの生活全般に対してもっと面倒をみたいと望んでいる。子どもの例では母親の昼間いないことに、対して、淋しい二五・七％、はじめは淋しかったが今は何ともない四五・七％で、結局両方を合せて淋しいと感じたものが約七〇％いる。母親が家にいてほしいかという問に対しては、やはり七〇％のものがそれを望んでいて、全体で約七〇％のものが感情的不満をもっているようである。またこれには年齢差がみられ、中学高校生の九〇％のものが母に家にいてほしいと望んでいることは注目すべきことである。これらの子どもたちにとって一日中で、一番楽しい時は、家にいる時が楽しいと答えたのが約五〇％で、とくに夕食時からねる迄の一家団欒の時を楽しみとしている。しかし、学校に行っている時が楽しいと答えたものが約四〇％あるが、これは、親のいない家に帰った時の寒々とした家庭の空気よりも学校を好んでいる気持の反映ではないかと思われる。また一番つまらない時では、学校から帰った時や両親が出かける時が四五％で、両親がいないこと

をつまらなく思っている。それでは最も楽しめるべき夕食の時、子どもは誰と食事をしているか。両親と一緒に約三〇にしすぎない。このほか子どもが自分の家庭と他人の家庭を比べて、他家をうらやましいと思うことがあると答えたものが、男女平均で六〇%であった。物質的なことについて五七%あるが、男女差がみられる。女子では物質的面的約二〇%、母親に関するもの約六〇%、家庭に関するもの二〇%で、精神的不満が八〇%に達している。これに反し男子では物質的面的が九一%を占め、母に関するもの九%となっている。女子でもこれを年齢的に見ると、中学高校生に精神的不満をもつものが多いようである。全体的に、両親が働きに出ることに對して、感情的不満をもつものは、小学生よりもむしろ中学高校生に多いが、調査では面接でも質問書でも、表面は平気を装い、母にいたわりと尊敬と感謝の念を抱き、また弟妹へのいたわりを示しながらも、心の底では母親を強く望んで一まつの淋しさを藏していることがうかがえる。母親の方は、子どもが中学生になると物わかりがよくなり安心して働ける、と云っている人が多く、中学高校生が自分の世話をしてもらいたいと望んでいることや、話し相手になってもらいたいと望んでいることに気付いていないか、または気付いていてもそれを軽視している人が多く、むしろ小学生や幼児ばかりに気を配っている傾向もみられた。

最後に総合的考察を加えると、父親では、経済的に安定したというのが三六・二%ある反面、それと同じ位の率で子どものしつけがおろそかになるという短所が三七・五%でてきており、妻が社会的に向上したというのが二〇%ある反面、家事がおろそかになり家庭が暗いというのが三〇%も出てきている。また夫婦相互の理解が深まる一七・五%があるが、その反対にうまくいかない二二・五%がある。

子どもに直接影響のある面では、子どもに良い影響を与える七・二%、明るくなる二・六%で合計約一九%は子どもに良い影響を与えらるといっているが、短所としてしつけが不十分だ三七・五%、家庭が暗くなる三〇%で計六七・五%は子どもに悪い影響を与えているという意見をもっている。母親では、子どもは依頼心がなくなり強くなる一方、独立自主的すぎる短所があると称し、親子の愛情がとくに深くなると感じている一方、甘やかしがちになり母と子の時間は少く淋しがるという短所を感じている。また規則正しくやると思っている反面、しつけがおろそかで時間的にルーズになる面もあるといった具合である。すなわち母親の意見では、子どもに与えるよい影響は計五五・六%あり、わるい影響の方は計七四%のものがあげられていることがわかる。一方子ども側から見た意見によっても、淋しい気持をもっているのが約七〇%ある。

要するに、この調査から、共稼ぎ家庭の子どもたちは、父親の意見から見ても、母親の意見から見ても、また子ども自身の感じている気持から見ても、全体の約七〇%は、何らかの感情的に不安定なところが見られるということができる。

\*

\*

\*

\*